

CALLシステムでできること

法学部 皆川 泰雄

WHAT CALL CAN DO

Yasuo Minakawa (Faculty of Law)

At present Niigata University is using the Third LL classroom for CALL education. CALL is short for Computer-Assisted Language Learning. In CALL students' independence in learning foreign languages is an important element. At present the following three classes are possible in the Third LL classroom: 1) Lessons using computer related teaching materials of stand-alone, 2) Lessons using "Study Wave", 3) Lessons using Internet. In the paper which follows, I'll discuss the concrete possibility of each lesson, and introduce some examples of lesson practice in 1) and 3).

Key words: Computer-Assisted Language Learning, Students' independence in learning foreign languages, Authentic information

I. はじめに

新潟大学ではCALL教育の可能な教室として第3LL教室が稼働している。他により適任の方がおられると思うが、この教室を使わせてもらっている者として、この教室でやってきたこと、この教室で可能なことについて書いてみたい。外国語教授法の工夫の一つとして、このCALLシステムが十分に活用されることを願っている。

II. CALLの概念について

CALLはComputer-Assisted Language Learningの略称であり、文字通り「コンピューターに支援された外国語学習」を意味する。ただしこのCALL概念は、野澤(1993)によると次のような背景も含めて理解されている。

1960年代以後の急速なコンピューター技術の進歩と共に、学習者の主体性を重視する教授・学習システムが開発されてきた。その過程で構築されたCAI(Computer Assisted Instruction)/CAL(Computer-Assisted Learning)という各々「コンピューター支援授業」「コンピューター支援学習」と訳される教育シ

ステムは、「教師中心の教授よりは、学ぶこと、つまり学習者中心の学習を中心としなければならないという考えに基づく」ものであり、「学習者の問題意識、自己表現力を刺激し、自発的な学習活動を促進させる目的」をもつものとされる。

CALLはこれを外国語学習に適用したもので、「基本的には外国語教育の分野で利用され、コンピューターが教師の代わりをするが、一斉授業ではなく、個々の学習者の能力と学習スピードに合わせた個別学習スタイルを提供するシステムである」とされている。

さらにCALLLという概念がある。これはComputer Assisted Language Learning Laboratoryの略称であり、以上のようなCALL教育を可能にするシステムにLL機能を統合し、各々独自でも、一体化した形式でも利用できるものをいう。第3LL教室のCALLシステムはまさにこのCALLLに当たる。

III. CALL教室としての第3LL教室の設備

1. LL設備 LLC-2000MH とよばれるシステムが設置されている。このシステムの特徴は、テープ、CDあ

るいは MO ディスクでマスターコンソールのメモリーに音声を記録させておけば、学生は各自のブースから自由にアクセスして、任意の箇所を、何度でも繰り返し聴ける点にある。これまでのように録音用テープを忘れた学生を生協に走らせる必要はなくなった。これ以外は通常の LL システムと全く同じ機能をもつので、ここでは述べない。

2. CALL 設備 1. Windows NT のサーバー (富士通 GRANDPOWER 5000) 1 台 2. 教師用 PC 1 台 (富士通 FMV)。他に教師用として Mac PC 1 台 (G3) があるが、今のところ画面のみ転送可 3. 学生用 PC 32 台 (富士通 FMV)。4. プリンター 1 台。(EPSON LP-9300) 1. 2. 3. 4. が LAN (Local Area Network) によって接続され、さらにこの LAN が学内 LAN を介して外部のネットワーク (インターネット) に接続されている。5. Study Wave という学習支援ソフトがサーバーにインストールされ、LL システムとの連動や、教室内のネットワークをコントロールしている。Study Wave のためのオーサリング (教材作成用) PC (富士通 FMV) 1 台。

従ってこの教室で可能な学習形態は、LL システムの独自な使用を除いて、1) スタンドアローンのコンピューター用教材の使用、2) Study Wave を利用した授業、3) インターネットの利用となる。(相互に重なる部分も多い。例えばインターネットを利用し作成した教材を 1) 2) の形で使用する等)

IV. CALL 教育の可能性

1. スタンドアローンのコンピューター用外国語学習教材の利用。

従来一般的だった選択問題や穴埋め問題中心のドリル教材だけでなく、画像と音声、文字情報を統合したマルチメディアの外国語学習ソフトが作られ、市販されている。ホームページで公開されている場合もあり、ダウンロードして使用することも可能である。

筆者は現在 1 年生のクラスで Goethe-Institut 制作の Lina & Leo という CD-ROM 教材を使用している。外国から来た女子学生がドイツ語の堪能な (!) おしゃべり鸚鵡と共にミュンヘンやベルリンなど 15 のドイツ都市を巡るという、動画、静止画、文字、

音声を統合したマルチメディア教材である。都市ごとに 4 つの場面の会話と練習問題があり、会話場面では音声とともに吹き出して文章も提示される。文法は表、例文によって簡略に示される。ただし会話文や練習問題を収録したテキストは付属していない。

今回の授業の準備のため、昨年一通り文法を終えたクラスで約 2 か月間 (週 1 コマ) この教材を使ってみた。学生に対しては、個別に自分のペースで自由に進むこと、会話を何度か聞いた後に書き取ること、少なくとも 4 課 (全 15 課) まで進むことを課した。授業の最後に感想を書いてもらった。以下 6 項目にまとめである。マルチメディア教材の特徴を十分に認識した上で授業に使用する必要性を改めて感じさせられた。

1) 映像 + 音声による臨場感が最大の長所である。それが学習意欲を高め、理解力を高めることにもつながる。「歌が会話の中に入っていたり、登場人物の表情が豊かに変化するため、退屈せずにストーリーを追うことができた」。「鳥がドイツ語を話すことや各都市についての話などとても面白かったです」。「内容はそれほど面白いと思わなかったが、映像がついているので会話を理解しやすかった」。

2) 個別に学習できるため必要であれば何度でも反復できる。反面この長所を生かすためにかなりの学習時間を保証しなければならない。「同じせりふを繰り返し何度も聴いたり、自分のペースで授業を進めていける」。「今回 CD-ROM を使って授業する時間がとても少なかった気がする。時間があれば納得のいくまで聞き取りや問題をやることができたのだが」。

3) 1) 2) と関連して、マルチメディア本来の利点 (画像、音声、文字の統合された状態で、繰り返し文字で確認しながら音声を聞くことができる) を生かすには、制限された授業時間以外に、自習できる環境が必要。「家でゆっくり CD-ROM をやると、重要な文は何度も繰り返し出てくるし、何よりも独文をたくさん読むほどに段々辞書を調べなくともなんとなく文の意味が理解できるようになった」。

4) 学習者の自主性の尊重が、スタンドアローンのコンピューター学習の陥りやすい自閉性と紙一重であること。学生は一斉授業による教師や友人との関わりも求めている。「今までの授業とは異なっていて興味深

く取り組んだけれども、そもそも自習用という感じで先生の存在の意味を感じないし、友人たちと一緒に学ぶという本来の授業の形ではなく、自習している人が集まっているだけで、一緒にやることの効果も感じられないことがありました。時には、皆で同時に同じ場所に取り組んで読んでみたり、問題をやってみたりとかすると授業らしくなってくるのではないかと考えます」。

5) ペーパーと文字による定着、教師による文法の説明を強く要求している。「教科書がないというのが大きな欠点だったと思う」。「画像と音声を繰り返した後、本文を書いたものを見て、文法的説明を先生がしてくれる方が理解が深まると思う」。

6) いわゆる地域情報にたいする関心も深い。これはインターネットの利用にもつながる。「各々の都市の関連事項も勉強すると、内容がふくらんできて楽しいのではないかと思います」。「先生が教えてくれたように、インターネットなどでドイツの町の様子を見たりすると、リナと一緒に旅をしている感じがして、話しに入っていくやすいのではないかとと思う」。

今年度は4月から初級教科書とCD-ROMとを併用している。一斉授業の文法学習の進度に合わせてCD-ROMを進めている。CD-ROMを利用した授業は、会話の穴埋めテキストと訳のプリント配布 → 個別学習(第3LL教室) → 教師による文法説明と確認(とドイツ事情などの雑談)(一斉授業) → 個別学習(自習) → チェックのためのテストという順序を進めている。一斉授業の文法学習が終了した段階で、自由に好きな都市を選択させ、その都市について調べさせ、会話の書き取り、訳、練習問題を個別あるいはグループでやらせようと考えている。

さらに今年度はCD-ROMを貸与して自宅で自習できるようにした。問題は学生のPC所持率だが、授業開始時に約6割の学生(1年生)が自宅にPCを所持していた。それ以外の学生にはPCの購入、あるいは情報処理センターの利用を勧めた。しかし現在の情報処理センターのコンピュータ環境ではマルチメディア外国語教材を使用することができず、第3LL教室の空き時間を利用して自習させている。(2001年

12月に情報処理センターのPCが更新される予定で、以後マルチメディア教材も使用できるとのことである)

2. Study Waveを利用した授業

サーバーにインストールされた学習支援ソフト Study Waveの主要な機能は次のようなものである。

1) 学習者用PCのセキュリティの確保。教師によって登録されたアプリケーション以外は学習者は起動できない。現在Study Waveを使って授業開始した場合使用できるのは、Excel, Word, Typingソフト、CD-ROM教材、電子メール等に限られる。インターネット利用のためのWeb-Browserは使用可と使用不可のいずれかを選択できる。2) 学習者のPCの画面を教師がモニターできる。任意の(例えば教師の)PCの画面を他のすべてのPCに送ることができる。3) 自作した教材の学習者用PCへの配布と回収ができる。正解の表示、自動採点。教材はWordやExcelで作成する。あるいはオーサリング(教材作成用)PCを使いHTML(Hyper Text Markup Language)エディタでマルチメディア教材を作成することができる。さらに学習者の管理(出席、成績のデータ保存等)。4) アプリケーションのリモート起動。例えば学習者にWordを使って作文させ、その画面をモニターしつつ学習者のPCをロックし、教師が書き込むといったことができる。

筆者は1) 2) 以外にはこのソフトを使っていないので不明な点が多い。とくに自作の教材を使って授業を行う3)の機能を使用されている方のご教示を乞いたい。

3. インターネット環境での授業

CALL教育の画期的な可能性はネットワークで外部とつながることによって生まれた。受け身の「いつの日にか役立つ(だろう)」語学学習ではなく、その言語がリアルに生きる世界とかかわりながら学習を進めることができる。さらに最後にふれるが、いろいろな形で作成した教材をWWW(World Wide Web)上

に載せることによって、授業時間外の何時でも、教室以外の何処からでも学生はアクセスし学習できるようになる。現在CALL教育という場合、この新たなインターネット環境での可能性に重点を置いて用いられているようである。一昨年使用した初級の教科書にドイツの小さな町が登場した。学生にドイツ版のYahooで検索させ、緑につつまれた古い城壁をもつ町の美しい風景がモニター上に現われたとき、教室中が息を飲んだ。教室の学習環境がそのままその言語の生きる世界につながるのが、何とんでもインターネットの効用である。

インターネットの機能の中でもっとも重要なものは電子メールとWWW(World Wide Web)であり、各々に外国語学習への利用が考えられる。

3. 1. 電子メール

外国と学習している言葉で電子メールを交換する。実際にこのような学習の実践が組織的に行われ、タンデム・プロジェクトと呼ばれている。タンデムというのは本来二人乗り自転車のことであり、外国語学習では互いに言語を教え合うパートナーとなることをいう。タンデム・プロジェクトとはこれを電子メールで行うもので、ドイツ語圏ではポツダム大学がドイツ語と他の言語との間でこのプロジェクトを試みている。参加者は両方の言語でメールを書く。コミュニケーションの実践がそのまま学習になるという意味で、きわめて魅力的な学習法である。いつか小人数の意欲のある中級クラスで実現したいと考えている。

3. 2. WWW(World Wide Web)の利用

教師がホームページ上に授業の素材を探して利用する場合と、学生が自主的に、自分の学習目的と語学力に合った教材を探す場合が考えられる。

外国の新聞、ニュースをインターネットで読む(聴く)。第3LL教室を使われている英語のY.先生がこのような授業を行っている。一人一人の学生にCNN等のホームページからもっとも関心のあるニュースを選択させ、その内容を要約発表させるという授業である。「学生はこれまで受動的に教材を与えられたことはあっても、自分で選択したことはない。自分の関

心に沿うニュースを選べることで学習意欲を高めているのがわかる」とのことだった。外国語の授業がそのままアクチュアルな情報を得るという外国語による実践活動になっている。学生に個別に調査テーマを決めさせ、インターネットで資料を収集させる、という発展形態も考えておられるとのことだった。

英語と違い学習期間の短い言語の場合、ホームページの文章を理解する能力が不十分だという問題がある。オーセンティックな情報が、教科書用に加工されたものでない文章で伝えられているだけに1~2年の学習では難しい。英語の場合と異なり、内容を理解するためにすでに得ている情報も少ない。教師が学習者の語学力を基準に教材となるものを探さなければならない。一つの可能性はホームページで提供されているその言語の学習用の教材を利用することである。昨年2年生のクラスで、ミュンヘンのGoethe-Institutがホームページで公開しているKaleidoskop, Alltag in Deutschland(ドイツの日常生活万華鏡)という初・中級用ドイツ語教材を使用した。その中の一つ“Tat”-Orte(「犯行」現場)と題された教材は、ドイツの社会で暮らす人々にとっては「日常的かつノーマル」と感じられる行為の「現場」写真とインタビュー(文字情報)で構成されている。「朝食」「買い物」「訪問」「スプレー塗料を使った(例えば電車の車体や公共施設への)落書き」「路上でのパントマイム」「自転車ゾーン」といった「現場」の中から関心のあるテーマを選択させ、グループをつくり報告してもらった。クラスの半数以上が夏休みのサマースクールに参加予定の学生だったので、興味をもって取り組んでくれた。対象としているのが異なった意識や価値をもつ社会であることを十分に感じ取らせてくれる教材だった。

その他文字+音声という点で適当と思われる教材はDeutsche Welleというドイツの海外向け短波放送局のサイトである。日々放送されるニュースの初級者版を提供している。ニュースの台本に、ゆっくりとアナウンサーがしゃべった音声がついている。

初級を大方終了しているクラスであれば、ドイツ版のYahooにアクセスさせ、学生の関心を聞き、それに応じた適当なキーワードを与えてどのようなサイトがあるかを検索させる(文章全体の理解は無理でも)と

いったこともできる。視覚的メッセージ（写真、ビデオ映像等）が文字情報の理解の不十分さを補ってくれるだろう。

3. 3. インタラクティブ性を利用した授業

ところで LAN や WWW というネットワークにはインタラクティブ（双方向）性という重要な機能がある。たんに一方的に情報を得るだけでなく、情報の受信者がメッセージを返し、それにまた発信者が答えるということができる。電子メールとの違いは、メッセージを交換するのが二者に限られないことである。例えば Web 上にホームページを見た人が書き込めるフォーラムが設定してあれば（一般に掲示版と呼ばれる）、このようなメッセージのやり取りがホームページ上に公開され、第三者もそれに参加できる。外国語で書き込める能力を学習者がもっていれば、作文練習がそのままコミュニケーションの実践になる。前述の Kaleidoskop の教材にはすべてこの掲示版 (Forum) が開かれており、昨年サマースクールから帰った学生に Eindrücke (ドイツでの印象) という教材のフォーラムに投稿させた。実際の学生の投稿例を [参考文献] の後に挙げた。*)

以上は人間が双方向性を利用してメッセージ（反応）を返す例。ソフトをあらかじめプログラミングしておけば、コンピューターが即座にこのメッセージ（反応）を返すことができる。例えば前述の Study Wave というソフトは、教室内のネットワークで配布される教材も双方向性を利用できるようにプログラミングされている。教材に学習者が解答し、それに対して教材が即座に正誤判定や点数などフィードバックする。現在いくつかの大学で、このような外国語学習教材を WWW に載せ、いわゆるオンライン外国語学習システムを構築しようという試みが行われている。学習者はインターネットに接続しているコンピューターとブラウザがあれば、24時間、どこからでも利用できる。すでにこのような外国語学習システムを立ち上げているのは、筆者の知る限りでは、慶応大学の日吉キャンパス (Web Exercise)、大阪大学 (言語文化部の Windows NT サーバーにシステムがおかれ、大学近郊の市民にも開放されている)、

広島大学である。どのような言語であれ学習の最初の段階での反復練習は欠かせないと思う。クラスの人数によっては教師の注意が行き届かず、また一定のペースが要求されるため脱落者の出やすい一斉授業の補充として、自分の進捗とペースに合わせて十分に時間をかけて学習できるこのシステムを導入することは、大きな意味があると思う。

以上記述の不十分な点は、ご教示ご助言をいただければうれしい。第3 LL 教室に関心をもたれ、使用される方が一人でも増えることを願っている。

[参考文献]

- 1) 細谷行輝 (1997) 「教育と研究に活かすインターネット—マルチメディア外国語教育の可能性—」ドイツ語情報処理研究 9
- 2) 野澤和典 (1993) 「CAI/CAL/CALL/CALLL とは何か」北尾謙治監修『コンピューター利用の外国語教育』英潮社
- 3) 境一三 (1997) 「外国語教育に対するハイパーメディア環境の可能性について—CALL, VOD, Internet を中心に—」ドイツ語情報処理研究 9

*)

その一例を紹介したい。この学生は Menschen (人々) という項目のフォーラムに投稿した。投稿前に明白な文法的誤りに限り添削した。初めての外国体験でかなりプリミティブな「印象」であるが、異文化の認識も、普遍性の発見もこういった確かで具体的な感覚から始まるのだと思う。

Was mir auffaellt : Ein alter Mann und eine alte Frau sind gute Freunde in Deutschland. In Deutschland sind sie Hand in Hand spaziergegangen. Als ich das gesehen habe, habe ich eine gewisse Waerme gespuert. Aber in Japan habe

ich kaum diese Szene gesehen. Ich glaube, ein alter Mensch schaemt sich in Japan, Hand in Hand mit jemandem zu gehen. Deshalb sind Menschen, die ich in Japan Hand in Hand sehe, meist jung.

Seit ich diesen Sommer in Deutschland verbracht habe, meine ich, ein gemuetliches Leben kann auch im hohen Alter wunderbar sein. Ich glaube, wie Deutsche moechte ich alt werden. Und ich moechte in dem Park spazierengehen und ins Cafe gehen.

(訳：私が驚いたこと。老夫婦がドイツでは良き友達であること。老夫婦たちは手をつないで散歩していた。それを見たとき、何か温かいものを感じた。日本ではほとんどこういった光景を目にしたことがない。日本では老人は誰かと手をつないで歩くことを恥ずかしく思う。それで私が日本で目にする手をつないで歩く人々は、たいてい若いカップルである。この夏をドイツで過ごして以来、感情豊かな生活は高齢になっても素晴らしいものだと考えるようになった。ドイツ人のように年老いていきたいと思う。そして公園を散歩し、カフェに行きたい。)

これ読んだアメリカに住む60代後半の老婦人から投稿があった。彼女はアメリカ人と結婚し、47年前にドイツを離れアメリカに移住している。アメリカでの現在の生活について書いた部分と末尾は省略して紹介する。

Liebe T.,

ich habe Deine Zeilen gelesen und mich ueber Dein gutes Deutsch gefreut und ueber Deine gute Beobachtung. Es heisst 'wenn Einer eine Reise macht, dann kann er etwas erzahlen'. Ich bin Ende 60 und mein Mann ist Anfang 70, wir gehen auch heute noch gern Hand in Hand. [...] Ich habe in USA viel Neues erfahren, menschlich, sprachlich und kulturell, bin dankbar fuer das was ich im Ausland dazugelernt habe. Ich bin die ersten zehn Jahre in Italien

ausgewachsen.

Was machst Du in Deutschland? Bist Du in der Oberschule oder Studentin? Ich komme aus der wunderschoenen Studentenstadt Marburg an der Lahn. Ich wuensche Dir, dass Du wie viele Deutsche und Amerikaner auch im Alter Hand in Hand gehen kannst. Als ich jung war, gingen wir Freundinnen immer eingehakt spazieren. Das sehe ich zum Beispiel nicht hier - so ist es - andere Laender andere Sitten. [...]

(訳：親愛な T. 私はあなたの文章を読み、あなたの良きドイツ語と良き観察とをうれしく思いました。「旅に出れば、話題ができる」と言います。私は60代の終わり、夫は70代の始めて、二人は今も楽しく手をつないで歩いています。[略] アメリカで私はたくさんの新しいことを経験しました。人間について、言葉について、文化について。そしてアメリカという外国で新たに学んだこと、私はそれに感謝しています。私は10歳までイタリアで育ちました。

あなたはドイツで何をしているのですか。高校生、それとも大学生。私はラーン河のほとりの美しい大学都市マールブルクに居ました。あなたが多くのドイツ人やアメリカ人のように年をとっても手をつないで歩けばいいと思います。若い頃、私たちは女の友だち同士で腕を組んで散歩しました。たとえばここアメリカで私はそういった光景は目にしません—そういうものです—違った土地には違った習慣、といます。)